

コミュニティ・サービス・プログラムの意義と課題
タイ東北部を事例に

The Importance and Improvement of Community Service Program
Based on Experiences in Northeast Thailand

南 川 恵
Megumi Minamikawa

長崎ウエスレヤン大学現代社会学部紀要
11巻1号
Bulletin of Faculty of Contemporary Social Studies
Nagasaki Wesleyan University
2013年3月

コミュニティ・サービス・プログラムの意義と課題 タイ東北部を事例に*

南 川 恵**

The Importance and Improvement of Community Service Program Based on Experiences in Northeast Thailand

Megumi Minamikawa**

キーワード：体験学習、コミュニティ、途上国

Abstract

Nagasaki Wesleyan University has started a community service program in Northeast Thailand since the school year 2002 as part of the university's academic curriculum. This program endeavors to strengthen the university student's desire for learning and to fully realize the value of university education by focusing on interactive or intercultural activities with the local community and through a full immersion personalized experience on the life style of the impoverished through a home stay program. Students awaken to undiscovered facts which may bring significant changes in their lives or in the manner by which they think. In spite of the bigger risks compared with domestic ones, we still pursue expanding the program. This paper presents the relevance and importance of the international programs as compared to domestic ones. The areas for further improvement are discussed as well.

1. はじめに

長崎ウエスレヤン大学では、2002年度からタイにおけるコミュニティ・サービス・プログラム（以下、CSP）を、海外研修プログラムの一つとして毎年実施している。これは、社会貢献活動を軸に異文化に触れ貧困地域での生活体験を通して、課題解決を目指す学習の動機づけや自己啓発の機会を提供することを目的としている。さらには、日本社会のあり方を考えるとともに、学生自身がどう生きていくのかを模索する機会となることを目

指している。タイ東北部CSPは、国内で実施しているCSPと同様に位置づけられ、各サイトで30時間の活動を必須とした2単位科目に設定されている。現在、海外はハワイ、フィリピン、タイ北部、タイ東北部の4つのフィールドで実施しているが、本稿では、タイ東北部をフィールドとして実施しているCSPについて述べるものとする。

毎年、春休み期間を利用して実施されるタイ東北部CSPであるが、繰り返し実施するなかでプログラム内容は改善され、学生たちの参加動機にも変化がみられるようになってきた。「海外へ行ってみよう」という動機から、「今の自分を変えたい」、「何かできることがあるかもしれない」と自己変革や自己認識を求めたものへと変わってきた。つまり、自己発見や自身の変化のきっかけを海外体験へ求める傾向が高くなってきているのだ。若者の「内向き志向」が顕著にあらわれているとの指摘がある一方で、大学で学ぶ学生たちの多くが途上国での体験学習に意欲的に参加していることを強調しておきたい。

しかしながら、活動フィールドが海外となると事故や疾病、犯罪、自然災害等のリスクは、国内でのそれとは比較できないほど高くなる。また、現地の政治情勢や治安の状況によってはプログラム実施の可否を検討、あるいは日程や活動内容等の変更を余儀なくされることもある。その一方で、グローバル化にともない、大学の教育フィールドは加速度的に拡大している。

多くのリスクを抱えながらも海外体験学習が拡大している背景には、2008年に中央教育審議会が「学士課程教育の構築に向けて（答申）」の中で、学習の動機付けを図りつつ双方向型の学習を展開するため、講義そのものを魅力あるものにするるとともに、体験活動を含む多様な教育方法を積極的に取り入れることを大学の取り組みとして期待し

* Received February 12, 2013

** 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 外国語学科, Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan

ていると言及し、さらには2009年に開催された文部科学省国際教育交流政策懇談会で、「グローバル化に対応する人材や国際協力分野で活躍できる人材の育成が急務である。」と提言されたことがあげられる。そして、途上国の貧困地域をフィールドとして活動することに、国内におけるもの以上に意義をみだし得ているということが大きな要因であると考えられる。

先行研究においては、1990年代後半から様々な教育効果の検証が行われている。藪田(2011)は、異文化交流プログラムを通して得た経験が、日常の人間関係を強化することに有益であり、さらに広い人間関係を築くことにも、コミュニケーション能力全般を向上させることにも意義をもち得るとしている。また、高橋(2008)は、参加者の報告書をレビューすることからスタディツアーの教育的意義と課題について検証している。現地に身を置いて、多様な人と出会い、そこに生きる人間のエネルギーを目の当たりにしながら、貧困や開発援助の真実を探る学びは非常に大きく、それが自分自身を見つめ直す機会にもなると述べている。さらには、このような機会を「こころが奮えるほど揺れ動く」体験と呼び、そのような体験を通して感じ、考えた経験が素晴らしい財産となることに教育的意義が存在すると言及している。また、大橋・和栗は、「国際協力や途上国についての理解がより現実に即した理解になると同時に、理解だけに留まらず、学生たちの中に課題が内在化されていくところに、体験学習の大切な意味があると考えます。」¹⁾と述べ、海外体験学習の意義を示唆している。

このように、海外での体験学習は教育的意義が確認できるばかりでなく、人間関係の構築やコミュニケーション能力の向上にも効果があるとされている。本学で実施するCSPの課題については、それぞれのプログラムが設定する目標や目的、フィールドが異なるためか類似しない。しかし、実施機関と受け入れ機関との調整を行うコーディネーターの役割が重要であるということや、振り返りの方法、要するに経験からの学びを言語化する方法、さらにはその評価方法について課題が残るという点では共通していた。

海外、とりわけ途上国をフィールドとする活動はリスクが大きく、課題も山積している。本稿では、まずフィールドが途上国であることの意味を明確にするために、フィールドの設定要因とフィールドであるタイ東北部の特徴を述べてい

く。そして、アンケート結果から参加学生たちの変化を観察し、海外体験学習を実施する意義について明らかにしていきたい。最後に、今後取り組まなければならない課題を整理してみたい。

2. フィールド設定の要因と活動地域の特徴

1) フィールド設定の要因

このプログラムの企画にあたっては、学生の参加意欲を掻き立てる動機となるものや活動内容の構成等を、ボランティアとは異質のものとしていくことが大きな課題であった。それは、学生たちの自発性を引き出すに留まらず、外国語学習の動機づけや異文化に対する姿勢・態度を身に付けること、そして人とかかわることの大切さを認識し、コミュニティの存在と役割の確認等が学びの中に組み込まれることを期待するからであった。従って、本学のCSPはスタディツアーの一つであると考えられる。スタディツアー研究会では、スタディツアーを「国際協力・交流市民団体などが相互理解や体験学習を目的として行うツアー」と定義し²⁾、企画者側が参加者に伝えたい特別なメッセージがある場合が多いと述べている。

海外におけるCSPは、国内における活動と比較すると環境の変化やメンタル面だけを考慮しても学生が抱く不安は大きくなる。タイ東北部CSPの実施地であるタイ東北部イサーン地方の主な産業は農業であるが、やせた土地であることに加え灌漑設備に乏しいため米の生産性は低い。従って、タイの中でも貧困な地域といわれている。このことが学生の不安を大きくすることも懸念されたが、あえてフィールドとして設定した。それは、この地域には貧困ゆえに伝統的な住民の助け合いの地域社会が強く残っており、学生の異文化理解やコミュニティ理解という要素が含まれることを重視したからである。

タイでは、国民の95%が敬虔な仏教徒であり幼少期から寺院へ通い、小学校から仏教教育を取り入れ、日常生活が仏教と密着して営まれているのが特徴である。そして、ここ東北部には、実にタイ全体の寺院の半数以上が集中し、日常生活が仏教的精神や慣習に基づいて営まれ、寺院がコミュニティの中心としての機能を担っている地域である。また、とりわけ農村部では、伝統的な相互扶助が機能するコミュニティの存在が確認できるのである。古くからの伝統を重んじ、年長者を敬い、近隣住民とのつながりを大切にしながら生活している様子を実感できる地域であるといえよ

う。学生に、倫理観の形成を担う宗教に接すること、さらには、日本では便利さの裏返しに衰退していったコミュニティの役割と重要性を認識してもらうことが大きな目的であった。

タイは飛行機で6時間程度と地理的に近く物価も比較的安いいため、欧米諸国で実施するよりも参加費を低く抑えることが可能であることも考慮してのことである。また、姉妹大学であるCollege of Asian Scholars（以下、CAS）の全面的な協力が得られることで、現地でのホストファミリーの確保や施設等への依頼、あるいは連絡調整等を容易に行うことができるのは大きなメリットである。プログラムを実施するにあたって事前に必要となる現地での施設の視察や調整等にかかる経費と時間をCASの協力によって削減し、主催側である大学や担当者の負担は軽減した。

2) 活動地域の特徴

中心となる活動フィールドを農村部の小学校とした。幼稚園から小学校6年生までが通うコンケン県ノンルア郡バン・サー村にあるサー・プラチャーサン小学校である。この小学校は行政区唯一の初等教育機関であり、中学以上は他の行政区にある学校に通うこととなる。この村の世帯数は168、人口は788人で2009年と比較すると23世帯増加している。(2012年3月1日現在)就業人口のほとんどが農業従事者である。一部は兼業者もいるが、サー・プラチャーサン小学校の保護者のほとんどにとっては、農業収入が主たる生計の手段である。さらに、この村の農民は小作農が多いため、親が出稼ぎ労働者としてバンコクや他県で働いている家庭もあり、家計所得のほとんどを食料費支出にあてざるを得ない家庭も珍しくない。

しかし、住民は互いの家族構成や経済状況を熟知しており、協力し助け合いながら暮らしている共助の村でもあるのだ。小学校の行事は同時に村の行事でもあり、さらには、小学校の運営にも地域住民が保護者と共に取り組んでいる。校舎の改築工事には住民が携わり、小学校のコンクリート外壁も住民の寄付金で作られたものである³。住民は親日性に富み、村を歩いていると声をかけてくれ、極めて開放的である。住居はタイの伝統的な高床式住居が多いが、屋根や壁がトタン造りの家も目立ち、ガラス窓がない家屋も珍しくない。貧困層が多い村落で、電気製品や自動車等の消費財の普及率は低い。

ここで学生たちは日本文化を紹介し日本語を教

える活動を主に、ホームステイを体験し様々な交流活動を行う。(表1参照)このような地域での活動を通して学生たちが学ぶことは、人とのつながりをもちながら生きていくことの大切さである。そして、コミュニティの役割とその重要性である。高齢者夫婦のみで暮らす世帯やひとり親世帯も多く、これらの家庭で話を聞くと、貧しいことにはかわりはないが生活自体に不安や不満はなく幸せであるという。困ったときにはみんなが助けてくれる。困っている住民がいるときは助け、そのようにしてこれまでも数々の問題を村が一体となって克服してきたという安心感があるというのだ。

この助け合いの精神は、彼らの生活に根ざした上座部仏教に基づくものであると考えられる。住民のほとんどが敬虔な仏教徒であり、日々の暮らしの中で功德を積む。とりわけ高齢の女性たちは、毎日食事をもって村の寺院に通い、正午までに二度僧侶の食事の世話をすることを日課としている。功德が積まれることによって現世での個人の運や境遇を向上させ、死後はよりよい来世を迎えることができると信じているのだ⁴。つまり、毎朝托鉢に回る僧侶や寺院に供物をささげることと同様に、困っている人を助けることによって功德が積まれると考えられているのである。なぜなら、自己犠牲的な行為を功德とするからだ。しかし、仏教に基づいた功德を積むための行為としてではあっても、村人たちは人を助けることを当然のことと捉え、隣人を心配し惜しむことなく協力するという姿勢が無意識的に形成されていったことが村人の生活からうかがえる。相互扶助の役割を果たしているコミュニティが、地域住民に安心感や幸福感を与えているのだ。

一方、日本においては高齢者が抱える不安は増すばかりであり、幸福度も決して高くはない。孤独死や子どもの貧困、生活保護世帯の増加が顕著となるこの社会に、欠如しているものの一つとしてあげられるのがコミュニティの果たす役割ではないだろうか。学生たちは、タイ東北部の貧しい農村でみる生きたコミュニティをどう捉えるのか。さらに、その形成の背景や役割を考え、さらには人としての生き方を考えることさえ求められることになる。このような貴重な機会となっているのがこのタイ東北部CSPであり、この地域だからこそ体験できるものなのだ。

表1 2011年度タイ東北部CSP日程

1	福岡国際空港集合 福岡→バンコク→コンケン	ホームステイ
2	お寺、村訪問、小学校での活動および自己研究調査の準備	ホームステイ
3	小学校での活動「50音を教える」、「動作で遊ぶ」、他	ホームステイ
4	小学校での活動「白玉づくり」、「ボディパーカッション」、他	ホームステイ
5	バン・サー村家庭訪問、振り返り 夕刻：コンケン市へ	CAS大学寮
6	CASでの学習 午前：タイ文化 午後：伝統舞踊、伝統音楽	CAS大学寮
7	スラム地区訪問、聞き取り調査、イサーン地方の特徴・貧困についてのまとめ講義	CAS大学寮
8	12：55コンケン→13：50バンコク (TG045) ホテルへ	ホテル
9	アンケート調査、振り返り	ホテル
10	バンコク市内視察、イサーン地方との比較 22：00チェックアウト 空港へ	ホテル
11	01：00バンコク→08：00福岡 (TG648) 福岡国際空港で解散	

実施期間：2012年2月25日～3月6日（11日間）

3. 海外体験学習の意義

1) 意義

多くの研究者が述べているように、海外体験学習の有意性は学生たちが五感を通じて学べるということにある。前掲の表のごとく11日間というわずかな時間に多くの人々との出会いがあり、多様な体験の場がある。ホームステイで日本とは異なる自然と共存した生活を体験し、異文化に戸惑うことも多々ある。そして、貧困地域で明るく逞しく助け合いながら生きる村人との触れ合いを通して、貧困とは何であるのかを考え本当の豊かさをみいだそうとする。僧侶や高齢者を尊ぶタイの倫理観から、自らを振り返り反省もする。決して豊かとはいえない家庭に育ちながらも、目を輝かせて将来の夢を語る子どもたちを目の当たりにし、自らがどう生きるべきかを考えるのである。

また、参加後のレポートからも多面的な学びがあることがうかがえる。フィールドでの体験から英語が使えないことを痛感し、生活のための英語を学ぼうと語学学習に取り組むようになる。異文化に触れ、自分の価値観だけを基準にしてはならないことを理解し、相手文化を尊重する姿勢を身に付け、さらには自らの文化の良さを再認識するようになる。現地で精一杯生きている人々と触れ合い、生きる希望やよろこびの真の意味を探求し始める。それぞれに感じ、考えることは異なるとしても、何らかの気づきや新たな自己発見の場となっていることに違いはないのだ。そして、それらの経験が自己を見つめ直すことを促し、その後の学びや生活に影響を与えている。

この貧困地域での体験学習に参加した学生たちのほとんどが、「学生である自分にできることは何か」と考え悩む。活動目標を定め、事前の教材等の準備に参加者が全員で取り組み、現地で活動する。活動を終えたときには、チームとしての連帯感とやり遂げたという達成感から自信を獲得する。そして、世界に混在する社会問題は、世界で考え取り組んでいくべきであると活動を始める。貧困が教育の機会を阻んでいる現実を知り、途上国の子どもたちの支援を目的として啓発活動を行うという意識や姿勢の変化もみられる。モチベーションは向上し、それが主体性をもって行動する力へつながっていく。留学生のサポートを積極的に行うようになり、人と深くかかわろうとするようになるという変化もみられるのだ。

2) アンケート結果から確認できること

2012年10月に過去のCSP参加学生15名を対象にアンケート調査を実施した。プログラムを通して身についた、高まった、あるいは広がったと思うものについてたずねている。最も多くの学生が回答したのは、「価値観」で93%を占めた。次いで、「異文化を尊重する姿勢」と「コミュニケーション能力」が73%、「実行力」が60%、「協働性」、「課題発見力」、「観察力」が53%という結果であった。これらの結果からまずいえることは、学生たちが社会人として必要な資質を獲得するうえで、この海外体験学習が一助となっているということだ。2011年1月発表の日本経済団体連合会が実施した「産業界の求める人材像と大学教育へ

の期待」に関するアンケート結果⁵によると、大学生の採用にあたって重視する素質・態度、知識・能力について、非常に重視するとの回答が多かったのは「主体性」で、次いで「コミュニケーション能力」、「実行性」、そして「チームワーク・協調性」が続いていることからそうであるといえる。

また、プログラムを通して学んだことについて自由表記でたずねた。47%の学生が、「人と人のつながりの大切さ」や「相互扶助の素晴らしさ」、「支えあいの必要性」を学んだこととしてあげていることから、コミュニティの重要性を理解していることがうかがえる。さらには、「自分の価値観ですべてを判断してはいけないということ」や「異文化を尊重する姿勢が大事だと思った」との回答から、異文化理解に必要な要素を獲得する機会となっているといえる。そして、「日本での生活が当たり前ではないのだということ」、「普通に生活できることに感謝するようになった」、「いかに自分たちが恵まれているかということ」、「豊かさの意味がかわった」という回答から、自らの生活を振り返るとともに、価値観に変化がみられる。中には、「体験することの大切さ」という回答もあった。

このようにCSPに参加した学生たちには変化がみられるのだ。そもそも、日常生活が体験学習の連続であるのだが、これを意識していないせいか体験学習とは捉えていない。意識することが重要であり、意識化へのプロセスが欠如してはならない。このために、活動を終えた後に各自が振り返りを行う。そして、それを共有する。これを繰り返すことによって、意識化を促すことができるのではないだろうか。

海外体験学習は学生たちを変容させるプログラムであり、座学とは異なり五感を使った体験からの学びであることに意味をもつ。そして、その変容ぶりを引率者はじめ教員たちが認識していることは事実であるが、これは主観的でもあり客観的な基準と評価をもって立証できていない。学生がその変化を自らの人生にどう生かしていくのかを考える作業を積み重ね、そして様々な社会問題の理解だけに留まらず、学生の中に課題が内在化されていくところに体験学習の大切な意味があると考えられている⁶。その成果を立証するためには、海外体験学習の教育的効果や学びの測定基準、評価方法を検討し、客観的な評価の確立へ向けて取り組んでいかなければならない。

現在、各大学においてはe-ポートフォリオ・シ

ステムを導入し、学習効力の向上に努めている。本学でもレポートや課題の提出の他、マトリクス型のポートフォリオを活用している。縦軸に「卒業までに身につけて欲しい知識・技能・態度」として、外国語運用能力や批判的思考力、異文化理解の姿勢や態度等の項目を設定し、横軸に「目標に添った到達目標と評価基準」を4段階のレベルに分けて設定し、学びの進捗の度合いを確認できるように設計している。海外体験学習の成果を測定するためには、これらe-ポートフォリオを活用することも可能であると考ええる。

4. 課題

海外、とりわけ途上国において継続的に海外体験学習を実施するにあたっては、主催側である大学が大きな問題に直面していることも否定できない。問題点として、(1)危機管理体制の徹底、(2)学内での全学的な理解を得ることと担当者の負担軽減、(3)事前・事後学習を含む単位化、(4)参加者の経済的負担の軽減、の4つがあげられる。これらは、海外体験学習を実施している多くの大学に共通している問題であるとも考えられる。

(1) 大学が安全配慮義務を全うするために危機を回避し、あるいは危機に直面した場合にとるべき対応を定めておく必要がある。本学では、「国際交流に関する危機管理対応マニュアル」を策定し、それに添って対応している。そして、不測の事態が生じた場合は、その影響を最小限に留める対策を講じることに努めている。また、参加学生には海外旅行傷害保険に加入することを参加条件としており、事故や疾病等の補償はそれで対応することとしている。

(2) 学内におけるプログラム実施に対する理解度は、海外だけでなく国内でのCSPを導入し、教員の半数以上が何らかのプログラムを担当しているからか、他大学と比較すると理解度は高いと思われる。しかし、担当者の負担を軽減する必要はある。担当者は、独自のプログラムを企画し、現地との調整や手配から、学びの効果をあげるための事前学習の実施、さらに引率中はいわば24時間体制の対応を期待され、帰国後は事後指導から報告会の準備と指導まで、責務が大きいばかりでなく、過大な時間と労力を費やすのである。また、精神的・肉体的負担も懸念されることから、これらの軽減、あるいは分散が喫緊の課題である。

(3) 現地での研修自体は単位化されているものの、事前学習と事後学習は対象とはなっていない

ケースも多くみられる。事前学習と事後学習についても、相応の時間を設け単位化を検討していきたい。タイ東北部CSPの実施にあたっては、タイの概要や文化について数回の勉強会を実施し、10コマ前後の時間を使い教材作成や活動準備を行っている。また、参加学生にはタイ人留学生によるタイ語講座の受講を義務づけている。しかしながら、帰国後の事後指導に十分な時間を費やすことができず、事前学習も訪問国の表面的な学習に留まっているのではないかとという反省もある。これらを単位化し、文献購読や自己研究、ディスカッションという流れのある学習機会を増加させることによって、理解をより深め、途上国で活動を行うことに対するモチベーションが高まる効果も期待できるのではないかと。さらに、事後学習の時間を通して、途上国での体験を学びにどう関連づけていくのか、あるいはどう生かしていくのかということを考えることによって、その学びをキャリアへとつなげることができるのではないかと。

(4) 独立行政法人日本学生支援機構が設けている「留学生交流支援制度（ショートステイ、ショートビジット）」がある。これは、「学生の国際的な流動性が高まる中、多様な学生の受入れ・派遣の機会を提供し、国際的な視野を有する学生の育成を促進するとともに、大学等における学生相互交流プログラムや大学間ネットワークの構築等に寄与し、大学等の国際化を促進すること⁷⁾」を目的とした制度である。申請し採択された場合には、奨学金が支給される。その奨学金を受給することによって、参加学生は費用の負担を軽減することができるのだ。

近年は、保護者が参加費用を負担してくれるという学生は激減し、ほとんどの学生がアルバイトで費用を捻出している。この制度を活用することによって、学生の経済的負担は軽減されることから、多くの参加機会を提供するとともに参加学生の増大につながると考えられる。しかしながら、これが永続的な制度ではないということも否めない。大学や保護者会、地域諸団体、企業等による、海外プログラムへの支援体制と制度の構築も必要であることを言及しておきたい。

危機管理体制やプログラム担当者の負担の軽減、単位化、参加学生の経済的負担の軽減と課題は山積しているが、より多様な海外体験学習の機会が提供されることを期待したい。今後は、これらの課題をはじめ、本稿では行うことができなかった学生の学びや変化をどう測定し評価してい

くかということについても検討していきたい。

注

¹ 大橋正明・和栗百恵『JOELNの歩み』大学教育における「海外体験学習」研究会、2011年7月、13頁。

² 高橋優子「スタディツアーの教育的意義と課題－JICAカンボジア事務所での経験に基づいて－」『筑波学院大学紀要第3集』、筑波学院大学、2008年、149－150頁。

³ 2012年6月の認定審査に向け、建物の改築や外壁・道路の整備を行っていた。

⁴ 林行夫「上座仏教の実践」綾部恒雄・林行夫編『タイを知るための60章』明石書店、2003年、174頁。

⁵ (社)日本経済団体連合会「産業界の求める人材像と大学教育への期待」<http://www.keidanren.or.jp>、2011年10月27日。

⁶ 大橋正明・和栗百恵『JOELNの歩み』大学教育における「海外体験学習」研究会、2011年7月、13頁。

⁷ 独立行政法人日本学生支援機構 <http://www.jasso.go.jp/kouhou/press/press110628.html>、2011年12月21日。

参考文献・参考資料

大橋正明・和栗百恵『JOELNの歩み』大学教育における「海外体験学習」研究会、2011年

サラ・コナリー／マージット・ミサンギ・ワッツ『関係性の学び方』山田一隆・井上泰夫訳 晃洋書房、2010年

ジョン・デューイ『経験と教育』市村尚久訳 講談社、2004年

高橋優子「スタディツアーの教育的意義と課題－JICAカンボジア事務所での経験に基づいて－」『筑波学院大学紀要第3集』、筑波学院大学、2008年

林行夫「上座仏教の実践」綾部恒雄・林行夫編『タイを知るための60章』明石書店、2003年

(社)日本経済団体連合会「産業界の求める人材像と大学教育への期待」<http://www.keidanren.or.jp>

藪田由己子「異文化交流プログラムにおける意識調査－韓国と日本の大学生のケーススタディーを通して－」『清泉女学院短期大学研究紀要29』、清泉女学院大学、2011年